

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 6 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770142

研究課題名(和文)現代日本社会におけるリスナーシップの役割：世代・ジェンダー・異文化との交差

研究課題名(英文)The role of listenership in contemporary Japanese society: The intersection between generation, gender, and cross-culture

## 研究代表者

難波 彩子(岡本彩子)(Namba, Ayako)

岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：00638760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：世代・ジェンダー・異文化などの社会的要因に着目し、会話におけるリスナーシップが、現代の日本社会でアイデンティティの構築及び円滑な人間関係の形成に果たす役割について分析した。(1)若い世代にあたる男女の大学生の多人数会話と、留学を予定する大学生に向けた留学前後のインタビューデータを新たに収集することができたこと、(2)男女のリスナーシップの特徴とアイデンティティの関係性や、積極的なリスナーシップの一環として考えられる同調現象が起こるメカニズムなどを提示したことなど、多くの進展があった。また、国内外の学会で研究発表を行なったことや、図書や学術雑誌を通じて論文を提示したことも重要な研究成果である。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

世代やジェンダーなどの社会的要素を考慮に入れながら、リスナーシップのミクロとマクロ構造の両方を取り入れた分析を行い、会話と社会構造の両方の強固な関係を提示した。特に、会話構造についてはリスナーシップのミクロな特徴や役割と、よりマクロな視点の両方を視野に入れ、会話の共創のメカニズムの解明を試みた。また、異文化についての研究成果は、日本社会に生きる人々が「自分らしい」自己認識を保ち、異文化を持つ人々に対する寛容さも育み、そして様々な状況を柔軟に対応ができるようなリスナーシップを兼ね備えたコミュニケーション力を養うことに役立てることが可能であり、重要な意義を持つと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to present how listenership in interaction played a prominent role in building people's identity and smooth human relationships in contemporary Japanese society by shedding light on three social variables: generation, gender and cross-culture. The main outcomes of the project are as follows: (1) two types of data were collected: multiple interactions among college students including both sexes, and interviews to college students before (1st stage) and after (2nd stage) their study abroad; and (2) distinct features of listenership in gender, and the mechanism of synchronized activities as an active listenership, were revealed. Such outcomes were also presented through several domestic and international conferences, academic books and journals.

研究分野：社会言語学、語用論、異文化コミュニケーション

キーワード：リスナーシップ 現代日本社会 世代 ジェンダー 異文化 同調現象 相互行為の社会言語学 場の理論

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来のコミュニケーション研究は話し手のパフォーマンスの詳細について焦点を置く傾向であったが、近年では徐々に聞き手のパフォーマンスに着目した研究も増えてきている (Goffman 1981, Gardner 2001, Tannen 1984, Yamada 1997, Mizutani 1993 他多数)。しかしながら聞き手の役割と笑いの関係性について調査した研究はまだほとんどなされていなかったため、日本語インターアクションにおける聞き手と笑いの関係性について調査し、会話のミクロ的な構造、会話構造全体とリスナーシップ行動の関係を扱うマクロ的な視点、そして会話構造を超えたより大きな視点となる社会構造との関係性を探る研究を行なった (Namba 2011)。この先行研究結果を踏まえて、笑いや他の言語・非言語現象を含めたリスナーシップ行動の詳細、リスナーシップと会話スタイル、社会的役割、アイデンティティなどについて、さらなる研究が必要とされることを実感した。このような視点から、以前の採択された研究プロジェクトでは、通文化的語用論の視点に基づいて、アイデンティティ構築の出発点とも言える「家族」の会話に着目し、リスナーシップと家族メンバーが担う社会的な役割の関係性について調査した (研究活動スタート支援『通文化的語用論におけるリスナーシップの研究』課題番号: 24820029, 2012-2013 年度)。この研究結果を発展させ、本研究では「家族」という基礎単位から広がる場や社会 (「大学」) に視点を移し、世代・ジェンダー・異文化といった社会的要素がアイデンティティの (再) 構築と変容に及ぼす影響を明らかにすることを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、相互行為の社会言語学などを中心としたコミュニケーション理論を用いながら、世代・ジェンダー・異文化などの社会的要因に着目し、会話におけるリスナーシップが、現代の日本社会でアイデンティティの構築及び円滑な人間関係の形成に果たす役割について探ることである。既存の家族会話のデータの分析を深めると共に、上記の社会的な要素を参与者のアイデンティティと関連付けながら新たに会話データを収集、そして分析することによって、これらの社会的要素とリスナーシップの関連性を見出し、その関わりがどのようにコミュニケーションの成否につながるのかについて検討した。そして最終的にはリスナーシップのメカニズムやプロセスを解明していくことを目指した。

### 3. 研究の方法

既存の家族会話データの分析については、「会話スタイル (conversational style)」 (Tannen 1984) を始めとする相互行為の社会言語学理論の枠組みに従って、リスナーシップと家族メンバーの担う社会的役割との関わりを特定した。上記 3 つの社会的要素のうち、世代とジェンダーについては男子学生と女子学生両方を含めた日本人大学生の自然会話のビデオデータを収集した。収集したデータについては、相互行為の社会言語学を中心とした言語理論や場の理論 (清水 2004) などを通じて、男女のリスナーシップ行動と参与者のアイデンティティ、会話の流れと共に生じるリスナーシップ行動と参与者の担う会話や社会的な役割との関係性、リスナーシップのメカニズムなどについてデータから実証的に分析した。一方、異文化については海外に留学予定の日本人大学生に向けて留学前後それぞれの段階でインタビュー調査を行い、やりとりはビデオで録画した。ビデオデータの録画後に、フォローアップアンケートも各協力者に向けて行った。異文化のデータ収集については留学前後を含めると長期間の時間を要するため、サンプルデータの収集をまずは目指した。集めたサンプルデータから日本人学生の異文化経験前の段階でのコミュニケーションと異文化経験後の段階におけるコミュニケーションの変化についてインタビューを通じて特定し、アイデンティティの変容について考察した。

### 4. 研究成果

研究成果については、(1) 世代とジェンダー、(2) 異文化 についての 2 点からなる。  
(1) 既存の家族会話データでは「会話スタイル」 (Tannen 1984) の枠組みに従って、家族メンバーが示すリスナーシップスタイルの特定し、リスナーシップと家族メンバーが担う社会的役割とのつながりについても考察した。収集した会話データは家族の食事場面で、親から子どもに向けてジョークなどを通じて積極的に働きかけるような状況が多くみられた。親からの積極的な働きかけに対して子供は笑いなどによる肯定的な応答が示し、親子で親和性の高い会話を協働しながら構築していく様子が観察された。食事場面でみられた親から子供に向けた積極的な働きかけは親の社会的な役割の遂行が関与する。その遂行の中で発される親からのジョークとそれを受け止める子供の笑いは、親子のやりとりを円滑に運び、親子関係の絆も深めていくことに大きな役割を果たしていることが分かった。これらの研究成果については、均衡・不均衡な参与枠組みをテーマにしたラウンドテーブル (2015) や、代表者が共催企画したワークショップ (2015)、そして日本認知言語学会のワークショップなどで発表し (2014)、2 つの研究論文 (2014) (2015) も提示した。

次に、上記の親子間のやりとりを中心とした家族会話から、仲間同士、先輩と後輩関係、教員と学生関係など、社会空間は外へと広がる世代へと視点を移し、大学生を中心とした若い世代のコミュニケーションについて検証した。社会空間が広がることで、参与者同士が担う社会的な役割もより多様となり、コミュニケーションでは複数の社会的な役割と会話上の役割が交

差し、絡み合う。そのような複雑化した空間の中でリスナーシップ行動が会話の共創に向けてどのように機能しているのかについて検討した。

ジェンダーについては収集した大学生多人数会話データより、女性同士、男性同士、男女混合の3種類の会話データを分析し、会話の流れの中でリスナーシップ行動がどのように用いられ、参与者同士の会話の協働構築にどのように結びつくのかについて検討した。参与者同士による共感の共有や協調、そして仲間意識の構築などが実践されていた。そしてその実践に向けて、女性同士、男性同士、そして男女混合の会話でそれぞれのアイデンティティを反映するような特徴が観察された。女性同士の場合、同時笑いや反応表のくり返し、声の協調などを駆使した共感や協調の共有が顕著であった。一方、男性同士の会話では同時笑いやさまざまな突っ込みコメントを重ねたからかいが顕著で、その結果仲間意識の構築につながっていることが指摘された。男女混合会話では、状況の女性同士の協調や共感、そして男性同士のからかいを通じた仲間意識の確認の両方を取り入れた特徴がみられた。男女による連携突っ込みプレーや、からかいを緩和するフォローアップなどが、同時笑いを伴いながら協力的に行われていた。こうした協働的な会話を作り上げる背景として、上記のリスナーシップ行動が会話の流れと共に積極的に用いられ、「コンテクスト化の合図 (contextualization cues)」(Gumperz 1982)として機能していたことが分かった。そしてコンテクスト化の活性化が進む中で、会話の盛り上がりや参与者間のあそびが深まっていたことは特筆すべき点として挙げられる。これらの研究成果については、聞き手行動をテーマに共催で企画したラウンドテーブル(2016)や、日本語用論学会でのワークショップ(2015)にて研究発表や論文を発表した。また、これらの研究成果を発展させ、学術図書『聞き手行動のコミュニケーション学』(2018)にて、2つの研究論文を提示した。

次に、大学生の会話データより、会話の「参与枠組み (participation framework)」(Goffman 1981)に基づき、「均衡」な参与形態と「不均衡」な参与形態の両方を検討し、親睦を深めていく会話のプロセスを踏まえながら、特に聞き手の「フットイング (footing)」(Goffman 1981)と積極的な関与の示し方を明らかにした。データ分析により、聞き手の中でも受け手と傍参与者の間で参与形態に差が生じることがあることや、消極的な傍参与者の参与も会話の流れの中で流動的に、柔軟に変化する様子を検証した。また、不均衡な参与形態が参与者間で認識された場合、均衡な参与形態へと導くような軌道修正が生じるといことも分かってきた。さらに、最小限の会話への関与を示す傍参与者が徐々に話の盛り上がりや他の参与者に同調していく様子から、ダイナミックな聞き手の関与の在り方が明らかになった。このように、受け手と傍参与者のダイナミックで柔軟な参与形態とフットイングとの密接な関係性を探ることは重要である。それぞれの参与者は、話し手や聞き手の役割について一元的ではなく複数の役割を実際に果たしていることや、現在の会話状況から即座に聞き手や未来のイベントフレームにシフトしながら、会話上の役割も推移していく多面的な役割の交差がみられることが分かってきた。参与者同士が親睦を深めていく過程や不均衡な参与形態が均衡な参与形態に推移する過程には、話し手と協働しながら、聞き手によって紡がれる柔軟でダイナミックな参与形態と関与の在り方が深く反映されていることが明確になった。この研究成果については、図書『コミュニケーションを枠づける』(2017)の中で研究論文を提示した。

上記の積極的なリスナーシップ行動を通じて生じる柔軟でダイナミックな参与形態と関与が深まってくると、既存の話し手と聞き手の関係性に劇的な変化が生じ、両者の区別が消滅して「一体化し、会話の一体感が広がる現象がしばしば生じていることがデータ分析を通じて分かってきた。既存の言語学理論では話し手と聞き手が会話を交互に「対話的」に重ねていくことが前提となるため、上記のような双方の区別が消滅するような現象を扱うことはできない。この理論上の限界を超えるために、このような区別にとらわれない、より柔軟な理論として、新たに「場の理論」(清水 2004)から会話の一体感の現象について解釈することを試みた。

上記の分析で検討してきた積極的なリスナーシップ行動の中心となる同調現象に着目し、同調現象がどのように生じて参与者全体に波及し、会話の一体感が参与者間で共有されるようになるのかについて、同調現象のメカニズムと一体感の共有に至るプロセスの解明を試みた。会話の流れを数段階に分けて話し手と聞き手の関係性の推移を特定することで、様々な言語及び非言語行動による同調が機能していることが分かってきた。最初の段階では聞き手による積極的な問いかけと話し手によるあいづちやうなずきなどを通じた情報伝達が中心となる明示的なコミュニケーションが促進され、徐々に繰り返しや笑いなどの同調を通じて参与者全体の応答反応が加速し、相互応答システムが確立されていく様子が明らかになった。システム確立と共に同調現象は同時笑いや連携ジェスチャー、頻繁な繰り返しなどを通じて参与者全体へと波及し、徐々に話し手と聞き手の区別は消滅して会話の一体感が共有されていくことが分かった。同時笑いや頻繁な繰り返し、複数の言語及び非言語行動の共起など、話し手のパフォーマンスを超えて起こる積極的なリスナーシップ行動は、一見通常の会話スタイルから逸脱しているようにもみられるが、場の理論から検証していくことで、実は日本人の母語感覚に自然と調和しながら解釈されることが示された。リスナーシップ行動としての同調現象を通じて会話の一体感の共有が広がり、会話が共創されていくメカニズムとプロセスの解明は本プロジェクトにおいて大きな達成として位置付けられる。今後より幅広い言語文化の実践について本研究結果を応用していくことで、より汎用性の高いコミュニケーション研究の発展につなげていくことを

今後の研究のさらなる課題として取り組んでいきたい。同調現象についての研究成果については、2019年中に学術図書『場とことばの諸相』（近刊）の中で論文が出版される予定である。また、6月に開催される第16回国際語用論学会でもパネル発表を行うことが決定しており、同調現象についての研究成果を今後も意欲的に行なっていきたい。

(2) 異文化については、パイロットスタディとして6ヶ月から1年間の留学予定の4名の日本人大学生に焦点を置いて分析した。異文化に対する意識や自他の関係性、自身のコミュニケーションスタイルに留学前後でどのような変化が生じ、それらに対してどのように自身が受け止めるようになったのかについて、留学前と留学後それぞれインタビューを行うことにより、学生のアイデンティティの変容調査を行なった。分析の結果、留学先の文化や自分とは異なるコミュニケーションの在り方に触れることで異文化への理解を深め、その経験を通じて学生自身が異文化やコミュニケーションに対してより柔軟な視点を持つ変化が生じ、「対話の柔軟性 (communicative flexibility)」(Gumperz and Gumperz 1982) が養われていることが分かってきた。一方、留学前に学生自身の担う言語文化について言及することはなかったが、異文化を経験した留学後に自身が属する言語文化について認識することの重要性について言及していたことも顕著な特徴として挙げられ、異なる文化に触れ、多様な人々と長期的なコミュニケーションを重ねていく中で学生自身が客観的に自身の属する文化やコミュニケーションについて把握している様子が浮き彫りとなった。本パイロットスタディの結果成果を踏まえながら、2018年度まで継続的に収集してきた学生データをさらに取り込みながら異文化やコミュニケーションに対する意識とそして自身が属する文化とそのコミュニケーションへの意識の両面について詳細に検証していく。これらの研究成果としては、第20回国際社会言語学学会での研究発表(2014)や日本英語教育学会論文集(2017)にて提示した研究論文などが含まれる。新しいデータも今後分析に追加して、日本人学生のアイデンティティの変容調査を今後も継続していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- 1) 難波彩子「会話の共創で起こる笑いの一考察 リスナーシップ行動を中心に」日本語学 36(4), 164-176. (2017) (査読有)
- 2) Namba, Ayako. "The role of listenership in the co-production of a conversation: focusing on the contribution of Laughter in Japanese Interaction." In Harada, Yasunari, Sachiko Shudo and Makiko Takekuro (eds.), *Papers On and Around the Linguistics of BA*, 69-78. (2017) (査読無)
- 3) Namba, Ayako. "Presentation practices: Reconstruction of identity and intercultural communication." 日本英語教育学会第45回年次研究集会論文集, 45-51. (2016) (査読有)
- 4) 難波彩子「家族の会話からみたリスナーシップ」日本語用論学会第18回大会研究論文集, 1-6. (2016) (査読無)
- 5) 難波彩子「日本人の家族会話における会話スタイルーリスナーシップとしての笑い」日本認知言語学会論文集 15, 703-708. (2015) (査読無)
- 6) 難波彩子「日本語の会話ジョークにおけるリスナーシップ」日本英語教育学会第42回年次研究集会論文集, 57-62. (2014) (査読有)

〔学会発表〕(計6件)

- 1) 難波彩子「男女の会話の共創」ラウンドテーブル「<聞く><聴く><訊く>こと 聞き手行動の再考」(龍谷大学)(2016)(共催)
- 2) 難波彩子「男女の会話からみたリスナーシップ」(WS「リスナーシップとアイデンティティ 異文化とジェンダーの視点」)日本語用論学会第18回大会(名古屋大学)(2015)(企画責任者)
- 3) 難波彩子「合意形成に向けたリスナーシップ クロージングにおける笑いの一考察」(WS「リスナーシップとその役割の諸相をめぐって」)(岡山大学)(2015)(共催)
- 4) 難波彩子「参与枠組みを通してみる家族団欒作り 日本人家族会話からの一考察」(ラウンドテーブル「参与(関与)枠組みの不均衡を考える」(愛知大学)(2015)(招待)
- 5) 難波彩子「日本人の家族会話における会話スタイル リスナーシップとしての笑い」(WS「日本人の社会文化的認識と言語使用」)日本認知言語学会第15回全国大会(慶應義塾大学)(2014)
- 6) Namba, Ayako. "Re-constructing identities of Japanese college students: A dynamic shift after their overseas experience." 20<sup>th</sup> Sociolinguistic Symposium (Jyväskylä, Finland) (2014)

〔図書〕(計3件)

- 1) 難波彩子「序章 聞き手行動をめぐる研究の背景」村田和代(編)『聞き手行動のコミュニケーション学』ひつじ書房 pp.1-8. (2018)
- 2) 難波彩子「男女の会話の共創 リスナーシップとアイデンティティ」村田和代(編)『聞き手行動のコミュニケーション学』ひつじ書房 pp.209-240. (2018)

- 3) 難波彩子「日本語会話における聞き手のフッティングと積極的な関与」片岡邦好・池田佳子・秦かおり(編)『コミュニケーションを枠づける 参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版 pp.109-129. (2017)

## 6. 研究組織

### (1) 研究協力者

井出 里咲子 (IDE RISA KO)  
筑波大学大学院人文社会科学研究科・准教授  
研究者番号：80344844

### (2) 研究協力者

片岡 邦好 (KATAOKA KUNIYOSHI)  
愛知大学文学部・教授  
研究者番号：20319172

### (3) 研究協力者

原田 康也 (HARADA YASUNARI)  
早稲田大学・法学学術院・教授  
研究者番号：80189711

### (4) 研究協力者

Gafaranga, Joseph  
The University of Edinburgh  
Department of Linguistics and English Languages, Senior Lecturer

### (5) 研究協力者

McDermott, Imelda  
The University of Manchester  
Division of Population, Health, Health Services Research Primary Care, Research Fellow